



撮影協力：五けんしも

ゆうか ひろこ  
勇家 寛子 さん

1964年京都市生まれ。日本舞踊が好きで、小学生の頃の夢は舞妓だった。時代劇に魅せられ、高校卒業後は東映俳優養成所へ。役者として経験を積むなかで、由美かおるさんや美保純さん、池上季実子さんの吹替えを務めたこともある。所作と京都弁の指導には定評がある。喜劇俳優・芦屋小雁さんの妻兼マネージャーとしても、多忙な日々を送る。

所作や京都弁も見どころのひとつ  
時代劇を好きな人が増えたら  
うれしいですね。



『花戦さ』や『関ヶ原』の台本には、撮影時にチェックした書き込みがびっしり。「NG」の指摘も随所にある。



時代と文化の考証は、役者の演技に命を吹き込む。撮影の現場を縁の下で支えるのが、楽しい。

# 縁の下のかもち

リアリティある時代劇を支える  
役者経験を生かした、所作と京都弁の指導

日本映画発祥の地、京都。エンドロールを見ると、気の遠くなるほど多くの人が映画づくりに携わっている事実が気づく。堀川御池の友禅職人の家に生まれた京おんな、勇家寛子さんもその一人だ。時代劇に魅せられ、東映俳優養成所へ。役者を経て、今は時代劇の所作や京都弁指導にも腕をふるう。

映画『里見八犬伝』（1983）で薬師丸ひろ子さんの吹替え（代役）をしたのが深作欣二監督の目にとまり、映画『おもちゃ』（1999）で所作と京都弁の指導に抜擢。初仕事は、台本を京都弁に置き換えるところから始まった。

京文化への造詣に加え、役者の気持ちや、現場の事情を理解しているため、依頼は引きも切らない。最近では『舞妓はレディ』（2014）、『花戦さ』（2017）、『関ヶ原』（2017）と、京都が舞台の映画の仕事が続く。

口調ひとつで、ニュアンスが変わってしまうのが京都弁の危ういところ。京都人の役がついた東京の俳優たちにとって、勇家さんは心強い存在だ。現場に付きっきりで役者の演技をチェック。撮影の流れを削がないよう気を配りつつ、録音や監督に修正を促す。100人以上のエキストラが群衆として登場するシーンでは、時代劇にそぐわない動きはないか、全員に目を凝らす。この地道な作業が、映画にリアリティを生み出す。

「映画は100年先に残る文化。歴史資料のつもりで指導しています」と勇家さん。京都の役者だからこそのわかる、京都のリアリティがある。

私もかもちです

華やかな映画の世界で、時代劇のリアリティを高めるために所作・京都弁指導に心を砕く勇家寛子さんと同様、三洋化成工業も、暮らしや産業の様々な分野を支えています。



三洋化成工業株式会社

京都市東山区一橋野本町11-1

最寄りバス停は「泉涌寺道」



パンアイ500m



「はたらき」を化学する。  
"Performance" Through Chemistry